



高岡が、奇跡的な大転換に成功したって？

# 開町まもなく、 最悪のピンチを 最高のチャンスに変えた、 お殿様と町民たちの物語。

日本遺産「加賀前田家ゆかりの  
町民文化が咲くまち高岡——人、技、心——」

いまから約400年前に加賀前田家二代当主の前田利長が、この地に高岡城を築いて、高岡の町が開かれました。しかし、開町からわずか5年で利長は他界し、「国一城令で廃城となった高岡城。三代当主の前田利常によって、その熱い遺志は受け継がれ、やがて、町民のまちへと大きな転換を遂げていきました。最悪のピンチを、最高のチャンスに変えた、お殿様の英断と町民たちの心意気とは。



## Story.2 武士のまちから、 町民のまちへの大転換 利長が抱いた希望を受け継ぎ、 まちを存続させるため 商業政策を次々と打ち出す1

城がなくなれば、城下町は存在の意義を失ってしまいます。高岡は政治都市として日が狭く、町を存続するにはそれ相応の対策がなくてはなりません。そこで二代当主・前田利常は、活を入れ直して直します。高岡町民の他所散出を禁止し、その上で、布御印押人を置くことで高岡を麻布の集散地とした。さらに、御荷物積魚問屋や塩問屋の側溝を認め、城跡内には米蔵と塩蔵を設置するなど、商業都市への転換策を積極的に講じていきました。

利常は、利長が高岡に相当の希望をかけていたことを知っていました。だからこそ、商業都市への政策転換を進める上でも、利長が築き上げた町割りなどを活かした形で打ったのです。異母弟である自分自身が監督を譲つてくれた利長の恩義を深く感じ、利長の菩提のために壮大な伽藍建築を持つ瑞龍寺を造営しました。また、異例の規模を誇る墓所もつくっています。これは、利常自身のみならず、町民に永く利長の遺徳をしのばせ、それと併せて町の繁栄を願う気持ちも込めて建立されたものなのです。

また、利常は高岡が軍事拠点としての機能を失うことに対する危機感を持っていました。高岡城内には平和的利用として米蔵の藩蔵を建てることによって藩府に干渉の口実を与えず、いそいそうちに備え、城の郭や堀は完全な形で残すことに成功しました。いかに高岡城を重要視していたかが、わかります。

その姿は今日でも変わらず、利常の優れた経営手腕は、現在も高岡市内に数多く残る関連文化財群に垣間見ることが出来ます。



## Story.3 「加賀藩の台所」として 隆盛を極めた高岡

海産豪華な装飾を  
まちごとに競い合う御車山は、  
町民の心意気そのもの

高岡町民も利常の保護と期待に応え、高岡は商人職人のまちとして、着実に歩みを進めました。鋳物づくりでは最初は、銅釜などの生活用具、農具の鉄器類が多くつくられていましたが、次第に、花瓶・火鉢・仏具などの文化的な物品の需要が高まり、装飾に富んだ製品がつくられるようになりました。銅器製造が盛んになると、北前船・海客船で全国各地に販路を確保し、海外貿易にも進出するようになります。また、伏木港は加賀藩全体の物資の集散地となり、北前船の寄港地として栄え、高岡は「加賀藩の台所」として隆盛を極めました。

そうして財を成した豪商たちが細細たる装飾を競い合ったのが、御車山祭です。7基の御車山には彫金・漆工・染織など高岡の伝統工芸の粋を集めた豪華な装飾が施されました。前田利長が町民に分け与えたことから、はじまった御車山。当初は条件もなかった山車が、長年、町ごとに競い合うなか、現在のような豪華なものになりました。ともにまちの発展に貢献してきた町民の心意気を象徴しています。

## Story.4 町民の心意気と、 ものづくりの魂をこれからも

開町以来、無くならないものづくりへの思いは、最先端のデザインへとつながった!



高岡の発展は町民自身が行ったこととなり、地域に富を還元してきたことが特長です。近代以降、明治の文明開化とつた全国的な時代の変遷を経て、町民にとっては商売継続の望みを失うことなく、むしろ実力を存分に発揮でき、長年待ち望んでいた好機として捉えられました。

事実、維新後は鼠片の所在地ではないためのハイキヤップを負いながら、常に日本海側屈指の商都市として気を吐いてきました。特に、鋳物業などの伝統産業は、織細な技術や現代のラフスタイルに合った最先端のデザインで、全国的にも注目を集めるようになっていきました。

現在でも、町割り、街道筋、町並み、生業や伝統行事などに町民の歩みが独特の気風として色濃く残されている高岡。競い合いながら発展を続けてきた町民の心意気は、DNAとして、いまも人々に受け継がれています。でも、高岡はまだ発展の途上。歴史と文化の保存を継承だけでなく、歴史資産を活かした、新たな文化や魅力の創造に力強く歩み始めています。

デザイナーとのコラボによる最新商品のほか、ものづくりの現場を体験し、職人と交流するツアー「高岡クラフトウォーク」も人気。

## Story.1 150日で高岡城を築城、 しかし、6年で廃城へ

利長の他界や、  
一國一城令によって、  
城下町は滅亡の危機へ



高岡は北陸を代表する米どころとして知られる。砺波平野、射水平野を背後に控え、北は富山湾に面し、両側海岸からは海越しに3000メートル級の立山連峰を望むことができる。豊かな自然や食に恵まれたところ。古くは旧石器時代まで遡る人々の営みがありました。

現在の高岡の基盤は、近世初期に形成されました。加賀前田家二代当主の前田利長は、若き頃に山城守山城から俯瞰し、この高岡の地が要害としての軍事的な機能だけでなく、水陸交通の要衝として経済的な機能を合わせ持つ理想的な地であると見抜きます。そして、慶長14年(1609)に、隠居後の城として高岡城を築城しました。利長はこの地で築城できる機会を待ちに、驚異的な早さで建設工事を進めます。そして、築城開始からわずか150日ほどで入城するに至ります。利長には、それほどまでに急がなければいけない理由があったのでしょうか。

利長は下町の角に、資材の集積と調達を行うための拠点「町倉」を設けたり、砺波郡の西部金屋から7人の鋳物師を招き、鋳物づくりを行う鋳物師町(金屋町)をつくりました。鋳物師には地租を課さない厚い保護や特権を与え、鋳物づくりを奨励することで、城下町としての繁栄を図ったのです。

しかし、高岡城を創建して、その後、400余年に渡る高岡市の発展の土台を築き上げた利長でしたが、在城わずか5年、他界してしまいました。家臣団はこころを金沢に引き揚げ、さらには翌年の「一國一城令」によって、高岡城は廃城という過酷な運命へ、城下町の歩みを始めていた高岡は、たちまち絶望の淵に突き落とされたのでした。